

## 高等学校における「総合的な学習の時間」を活用した ESDの展開（Ⅱ）

湯浅 清治 由井 義通 草原 和博 阿部 哲久  
栗谷 好子 伊藤 直哉 高田 悟 橋本 浩  
藤原 隆範 宮本 英征  
(研究協力者・分担執筆者：岩村 拓哉)

### 1. はじめに～ESDの一般的理念の概要

国連持続可能な開発のための教育の10年(UNDESD, 2005年～2014年)が大詰めを迎えている。周知の通り、UNDESDはユネスコがリードエージェントとなつて取り組んでいるものであり、その活動の基盤となっている文献がUNDESD国際実施計画(IIS)である。IISはUNDESD開始年の2005年に最終版が公表され、日本でもそれをもとにして2006年に「わが国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」(以下、国内実施計画)が策定された。

国内実施計画では、ESDの目標について「すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し、また、持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれ、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすことです。」としている<sup>1)</sup>。すなわち、個人レベルで言えば、ESDは最終的に、日常生活におけるライフスタイルを持続可能な社会の構築に寄与できるよう変革することを目指しているといえることができる。

ところで、このようなESDには大きく分けて二つの潮流があると見ることができる。すなわち、「持続可能な開発」概念を生み出した環境問題を主体とした環境教育の流れと、「社会開発」や「人間開発」といった開発概念を主体とした開発教育の流れである。

「持続可能な開発」概念は、端的に言えば「地球の生態系が持続する範囲内で開発を進める」という考え方である<sup>2)</sup>。したがって、環境教育では持続の対象はあくまで自然環境という狭義の環境であり、それを脅かす環境問題の解決や阻止を社会全体で行えるよう、個人を意識変容させることが環境教育の主題となる<sup>3)</sup>。

一方、「社会開発」は「生活基盤整備である生活の質の向上を目指す取り組み」であり、「人間開発」はその生活の質の向上を支えるコミュニティ構成員の意識化と人間が持つ潜在的な能力を社会の中で発揮できるようにするエンパワーメントを意味している<sup>4)</sup>。したがって、「人間開発」を通して「社会開発」に参加する技能と態度を育成するのが開発教育であり、その持続の対象は地域社会の構成員、あるいは地域社会そのものとなる。もっとも、開発教育は究極的に「公正な地球社会づくり」を目指している<sup>5)</sup>ため、そのスケールは場合に応じて変化する。

では、このような二大潮流を踏まえたESDはどのような教育活動となるのか。その定義としては、まさに国内実施計画で示されたESDの目標が当てはまる。要は、環境教育的アプローチであれ、開発教育的アプローチであれ、学習者の意識や行動を持続可能な社会の構築へ向けたものへと変容できる学習プログラムがESDなのである。

本研究では、このような立場に基づき、環境教育的アプローチと開発教育的アプローチの二側面から、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)を使用してESDの授業を実践するもので、クロスカリキュラム的な利点を持つ総合学習の効果を試みるものである。

(岩村拓哉)

### 2. 研究の方法

本校教育課程では、高校2年に2単位の総合学習が組まれている。昨年度から、そのうちの1単位がESDに当てられることとなり、その時間を地理歴史科・公民科の8名が担当しているが、本年度はその2年次にあたる。

---

Seiji Yuasa, Yoshimichi Yui, Kazuhiro Kusahara, Tetuhisa Abe, Yoshiko Awatani, Naoya Ito, Satoru Takata, Hiroshi Hasimoto, Takanori Fujiwara, Hidemasa Miyamoto, Takuya Iwamura: A study on the development of ESD in the classes of integrated studies (II).

表1 年間カリキュラム

回	1組	2	4	5	回	1組	2	4	5
1	全体会(1)				16	全体会(3)～後期の概要			
2	全体会(2)				17	(予備)			
3	A日①	D	C	B	18	E日②	H	G	F
4	A	D	C	B	19	E	H	G	F
5	A	D	C	B	20	E	H	G	F
6	B公①	A	D	C	21	F公②	E	H	G
7	B	A	D	C	22	F	E	H	G
8	B	A	D	C	23	F	E	H	G
9	C世①	B	A	D	24	G世②	F	E	H
10	C	B	A	D	25	G	F	E	H
11	C	B	A	D	26	G	F	E	H
12	D地①	C	B	A	27	H地②	G	F	E
13	D	C	B	A	28	H	G	F	E
14	D	C	B	A	29	H	G	F	E
15	前期テスト				30	後期テスト			

※1) 「日」は日本史, 「公」は公民, 「世」は世界史, 「地」は地理を表し, A～Hは「3. 実践記録」に対応する。

※2) 3組はSSHクラスで, 科学実習の時間となっていて, ESDは受講できない。

※3) 三学期は実施予定である。

初年度である昨年度は, ESDの教材を生徒に提示すること, その反応をみることに重点を置いた教材開発を行った。つまり, 8名がそれぞれに関心のあるESD教材の選定とその内容構成に取り組んだ<sup>6)</sup>。

昨年度の反省として,

・一斉授業か個別学習か, という授業形態が問われた。

生徒の意見の中にも, 「総花的」という批判がみられ, テーマを決めて時間をかけて生徒自らが調べて問題解決に向かう方法を求めている。

・クロスカリキュラムとして, 設定した同一テーマに関する専門科目からのアプローチを教材化する方法もあげられた。

そうした実践課題が山積する中であるが, 何よりもESDを教師自身が主体的に取り組む深めることが必要であると考え, 本研究においては教師サイドで自己啓発し実践を積むことを優先した。

教師自身が実践を積む方法として, 昨年度の内容構成をより深め, よりESDに近づく教材開発が考えられる。その第一歩として, 2時間構成を3時間構成に拡大発展させる方法がある。

昨年度の2時間構成の実践では, 欲張らずにまずは生徒たちに持続可能性を考える題材を提示することとどこが持続可能性として重要な要素・観点であるかを理解させることを目標とした。

本年度は, そうしたテーマの内容を一層深めさせることを通して, 生徒たちに自ら, 解決方法を考えさせる意欲・態度をもたせるような教材化に取り組んだ。そのために, 1クラスの配当時間を3時間ずつとし, 生徒の活動を取り入れる時間を保障するカリキュラムとしている。

年間の時間配分と担当は表1の通りである。

### 3. 実践記録

本年度の担当者とその実施記録は次の通りである。

なお, A)～H)は表1に対応している。

#### A) 日本史①=栗谷 好子

[テーマ] ～「格差社会」を考える

[授業のねらい] ～ESDが取り組むテーマには, 「地球温暖化や貧困, 平和など, 世界が取り組むべき地球規模の課題から福祉や多文化共生, 環境街作りなど, 地域の身近な課題まで」<sup>7)</sup> さまざまあるという。そこで, 「貧困」をとりあげて経済問題を考えさせる授業を実践した。

今日, 「格差社会」と言われて久しい。何兆円の資産をもつ「世界の億万長者」<sup>8)</sup> という特集が雑誌で組まれたり, 年収数億円というアメリカの証券会社社員がおり, 日本国内でも年収1千万円以上の富裕層が増

加しつつある。その一方で, 正社員のリストラが進められ, 非正社員の雇用が拡大し, さらに「派遣切り」という言葉がメディアで頻出している状況である。国民の平均貯蓄額は減少し, 無貯蓄率も20%を超え, 若年層にその傾向は強くなっている。競争原理の中で貧富の差が拡大し, 生徒の心をすさんだものにしかねない状況にあり, 重要な教育的問題ともなっている。このような格差がなぜ生じたのか。すなわち, 誰が, なぜ, どのように富み, それとの相関関係で, 誰が, なぜ, どのように貧しかったのかを知ることは, 社会的公平や公正を考えるために重要なことだからである。

現在のようなデフレ下ではなく, 景気が上向きつつあるときにも格差は拡大する可能性があることを, 生徒に探求させた。

[展開内容] ～本授業では, 過去の経済構造, すなわち「第一次世界大戦中の日本経済」を事例として取り上げた。現代の問題は解釈も定まらず, 教材化しにくい面があるが, 過去の事例は経過等が明確にされ, 解釈も定まっているので教材化しやすいと考えた。

知識・理解～講義形式で, 次の内容を理解させた。

第一次大戦中の日本経済は以下のように「大戦景気」といわれる好景気であった。

- ・戦争中の欧州やその植民地等に輸出を拡大した。
- ・日本は債務国から債権国となった。
- ・貿易額は対戦中に4倍に伸びた。
- ・工業生産額が農業生産額を上回るようになった。
- ・「成金」と呼ばれる富裕層も続出した。

思考・判断～しかし, 1918年7月には米騒動が富山県

で起き、8月には全国にその騒動は拡大した。好景気で富裕層が増大した時期であるにもかかわらず、なぜ、米価高騰に苦しみ、米騒動に参加せざるをえない貧困層が増大するのか。以上の問題を資料を用いて、生徒に考えさせ、自らを社会事象と関連付けさせた。

## B) 公民科①＝高田 悟

### 【教材の紹介】～京都議定書と中国・アメリカ

「持続可能な開発」が語られるとき、真っ先に挙げられるテーマが、地球温暖化だと思う。そのためのESDとして、理科や家庭科などでは、温暖化のメカニズムの科学的理解や代替エネルギーの模索、あるいは、温暖化に対応した生活の見直しが話題となる。公民科では、政治的・倫理的判断の問題として取り上げたい。その場合、京都議定書が、国際法としてどのような位置にあるのかを知り、さらにそれが孕む問題点を考えることで、正義論的な洞察に至るようにしたい。

【目標】～京都議定書に対する中国やアメリカの主張を検討し、「持続可能な開発」を正義論として捉える。

### 【展開内容】

第1次～2009年12月のCOP15終了の新聞記事を資料に、島嶼部の「グレナダの怒り」を導入とした。COP15が結局失敗した理由が、中国・アメリカの事情にあることを資料から読み取らせた。中国が「国際的な検証の受け入れを拒否」した本音が、経済発展が体制を維持するためにあること、アメリカが「説明責任のあるシステムがなければ国民は納得しない」のは、「国際競争力を失うことを恐れる」産業界の声が強いこと、また「温暖化防止の国内法成立が遅れ」ていることに触れた。さらに、「G77プラス中国」、「BASIC」を通じて、途上国・新興国をまとめる中国の外交戦略の強かさに触れた。中国が、現在温暖化ガス排出量1位にも拘わらず、あくまでも発展途上国として振る舞うあり方について考えさせた。以下2位のアメリカ、4位のインドの未加盟について考えさせた。

以上から、京都議定書に代わる新たな議定書が模索されていたが、結局失敗したこと、国際社会において「持続可能な開発」が総論では賛成でも、各論になるとどの国も国益優先の行動をする事実を認識させた。

第2次～中国の胡錦濤国家主席の「持続可能な開発」を中国も推進すること、そして「エネルギー効率を向上させる20年までに単位国内総生産（GDP）当たりの二酸化炭素排出量を05年に比べて顕著に減少させるよう努力」する旨の演説について知らせ、この方針はアメリカのブッシュ大統領の方針でもあったことを教えた。さらに、ブッシュの大統領選挙中の発言「京都条約に従って、世界の空気を浄化する重荷をアメリカに背負わせるつもりはない…。中国とインドは、その条

約から免除された。私たちはもっと公平であらねばならないと思う」を検討させた。

以上から、温室効果ガス排出削減の問題は、公平さ＝配分の正義に関わることを認識させた。京都議定書の前提のリオの宣言や気候変動枠組み条約のキーコンセプトが「持続可能な開発」と「共通だが差異のある責任」にあることを理解させた。

第3次～ブッシュ、胡錦濤が、「公平さ」「持続可能な開発」と「共通だが差異のある責任」に言及しているが、はたして適切か否か、真の公平さとは何か、を検討させることを最終の柱とした。検討する手段としてロールズの正義論を導入した。具体的にはロールズの表現に置き換える作業を生徒に行わせた。

## C) 世界史①＝藤原 隆範

テーマ及び目標は、昨年度と同じである。展開内容は、昨年度のものに修正を加えた今年度ものを記す。

【テーマ】～「南北問題とフェアトレード」

【目標】～コーヒーの生産と貿易を題材に、発展途上国の経済活動が先進国側に操られていることを理解させ、フェアトレードの意義を考えさせる。

### 【展開内容】

第1次～①コーヒーの生産国、消費国、輸出国、輸入国などを予想させ、コーヒーに関する世界貿易の現状を理解させる。

②コーヒーに関わる世界貿易の歴史について、教科書の知識を踏まえながら理解させる。

③コーヒーの生産から輸出まで、どのようなプロセスで行われているかを、発展途上国のコーヒー農家の立場で理解させる。

第2次～①クラスを7つの班に分け、1～6班にコーヒー農家、7班に先進国の貿易会社の役割を与え、貿易ゲームを行わせる。

②貿易ゲームを通して、コーヒー貿易で常に利益を得ているのは誰か、理解させる。

③貿易ゲームを通して、発展途上国のコーヒー農家の生活がなぜ不安定なのか、理解させる。

④貿易ゲームを通して、世界貿易の構造と問題点を理解させる。

第3次～①コーヒーの価格はどのようにして決まるのか、②世界貿易のなかで、常に弱い立場にあるのは誰か、を考察する活動を通して、③世界貿易のなかで弱い立場にある人たちの生活を保障するシステムとして、フェアトレードがあることを認識させる。

【考察】～この単元は、「世界史」と「政治経済」あるいは「現代社会」の内容を統合させて作ったものである。しかし、ESDとして作ったこの単元の目標は、知識・理解を踏まえて、「持続可能な社会」をつくるた

めには、どのような見方・考え方が必要なのかを考えさせることにあった。ESDは、「今だけよければよい」「自分だけよければよい」という見方・考え方を払拭することにある、と考える。具体的にはこの単元を通して、私たち先進国の人間が、安いコーヒーが飲めるのは良いことであるが、生産者の立場からそれは良いことなのか、みんなが良くなるためにはどうすればよいかを考えさせることにあった。本校ではユネスコクラブの活動として、文化祭でフェアトレードを行っている。なぜ、そのような取り組みがなされているのか、この単元の学習を通してよくわかったという感想が寄せられており、授業の成果はあったと考えられる。

#### D) 地理②＝湯浅 清治

[テーマ] ～過疎集落の展望を求めて

[目標] ～①日本の森林及び林業が環境を維持しつつ木材生産を行うことができるあり方を多面的・多角的に考えることができる。

②過疎地にとって何が必要であるか提言する力を養う。

[教材] ～①宮崎県諸塚村の森林認証制度 (FSC)

②現地調査で得た村の動向と特徴

[展開内容]

第1次～「森里海連環学」<sup>9)</sup>を紹介しその意義を考察することを通して、河川流域が1つの生態系であることを理解する。「森は海の恋人運動」を振り返り、自然と共生する仕組みを身近な事例とする。

第2次～日本の林業をステレオタイプのではなく、流動的である実態を具体的に分析し、前向きにとらえる姿勢を育て、里山としての森林のあり方を考察する。

第3次～諸塚村の調査を体験させることを通して、森林と人々の関わりに興味と関心を高めさせる。

- ・森林認証制度 (FSC) で、森林を適正に管理育成し、環境面で社会的に高い評価を得ていること。
- ・森林の適正管理及び木材供給を行う技術者を育成する法人を設立し、雇用拡大で人口減少に歯止め。
- ・FSCにより諸塚産の木材が高値で取引され木材加工業の活性化や木材需要の販路の拡大を確保。
- ・全村森林公園「百彩の森づくり」を村のテーマに掲げ、保養観光の場や研修の場とする村づくり推進。

こうした諸塚村の動きが、過疎集落にとって新しい将来像の一例となることをとらえさせる。

[考察] ～昨年度は2時間構成であり、上記の〔1時間目〕と〔2時間目〕の授業展開であり、抽象論に終始した感があったが、本年度は3時間構成となったため、具体的事例を扱うことで「地域の将来像を追求する過程」を盛り込むことができた。

持続可能な社会を実現する方策を追求する教育には、生徒一人ひとりに課題を持たせ、その課題に対し

て具体的に対応しようとする姿勢や態度が求められ、続いてそのために具体化する教育内容が提供されることが重要である。

本教材は、森林と林業の正確な理解を基礎知識に据えて、過疎集落の変容を教材化することで生徒に地域の将来像を考察する姿勢・態度を育て、具体例を知ることから過疎集落の持続性に可能性があることを気付かせようとするもので、それぞれの社会での可能性を切り開く方策を自覚させるのが目標である。

#### E) 公民科②＝阿部 哲久

[テーマ] ～議論を通じた問題解決学習

[目標] ～持続可能な社会のためのキーワードとして、「多様性」という視点を持たせるとともに、多様性を活かした問題解決に必要なスキルとして、「議論の方法」を身につけさせることを目指した。現在の社会を崖に向かって走る車に例えるなら、持続可能な社会の実現のためにはブレーキを踏むだけでは不十分であり、崖に向かわない別の道を探す必要があるのだといわれる。未知の問題解決を得るためには、多様性を持った一人一人が様々な角度から持続可能な社会の実現に向けたアプローチを行う必要がある。また、多様な意見をもとに問題解決のために意義のある議論を行うことは必須の技能であると考えられる。

[展開内容]

第1次～webをめぐる議論で登場した「群衆の英知」の概念を紹介しながら、多様性のもつ力について理解させた。また、日本人は同調圧力が強く多様性が欠けているという言説が一般に流布していることを考慮し、高野陽太郎の日本人の集団主義に関する研究を教材として用いて、日本人は集団主義的であるという言説は科学的な実験データによって否定され日本人に多様性が欠けている事実は無いということを理解させた。同時にこの研究を通して、社会に流布している言説を科学的に検証する必要性についても考えさせた。

第2次～多様性を活かすためのスキルとして、まず、経済学者の飯田泰之によってまとめられた有効な議論のための方法論を紹介し、定義を明らかにすることや、陥りやすい論理の罠、さらに予断や印象に左右されず科学的なデータに基づいて論理的に議論をすすめるための方法などを事例にあてはめながら考えさせた。

第3次～いわゆるトゥールミン図式を用いた、事実と価値観を切り分ける方法論を紹介し、異なる価値観の相手とも議論によって問題解決を模索することができることに気づかせるとともに、自分自身の価値観をメタ認知することが必要であることを理解させた。最後には簡単な演習を行った。

[考察] ～授業者の主観ではあるが、多様性が重要で

あることを学んだときに生徒が一様に明るい表情になったことが印象的であった。答えのない課題に前向きに取り組む展望を少しでも持たせることができたのではないかと考えている。しかし演習の時間が十分に確保できなかったことは反省点である。

#### F) 世界史②＝宮本 英征

[テーマ] ～「貨幣について考える」

[目標] ～持続可能な社会を考えるために、社会問題の原因の一つである資本（主義）との関わりについて思考できる単元を開発し実践した。具体的には労働を視점에資本主義社会とはどのようなもので、どのような影響を私たちの生き方や行動に与えているのかについて考えさせた。

[授業展開] ～①近代国家は国民国家を形成・維持する資本を国民の経済活動による富の産出に負っていたので、国民に貨幣を「持つ者」となるような行動を促した。このため、人々はより多くの貨幣を獲得するために人々との関係から疎外された労働に従事するという問題に直面した。②人々との関係から疎外された労働を行うのは貨幣を獲得するためであり、この場合、貨幣は国民の労働生産量を示す価値として、また国家にとっての交換価値を示す富の象徴として機能する。③人々との関係から疎外された労働を克服するためには、自分自身が決定した労働生産量と、自分にとって必要な使用価値を示す地域通貨のような貨幣を導入することで、他人のため、自分のための労働に従事し、自分自身の価値を貨幣以外に置くことができる、というものとした。

そして、貨幣の使用をシュミレーションすることで、実際に資本主義社会における労働の問題を体験させ、どのような労働を行うべきかを追究させた。授業の詳細は拙稿「現代社会システムを認識する世界史授業開発（Ⅲ）—単元『貨幣について考える』」広島大学附属中・高等学校『中等教育研究紀要』第54号2008、に示している。

#### G) 日本史②＝橋本 浩

[テーマ] ～身近な環境問題と私たち……レジ袋有料化を考える

[目標] ～身近なゴミ問題への関心から、エコやESDの問題を考えてみたいのが、ねらいである。

[展開内容]

第1次～ドイツの環境政策を扱ったビデオ「ドイツ・環境産業革命 1、包装法が社会を変える」(NHK)を視聴した。1980年代にゴミ問題に悩まされたドイツは、国も社会も根本的な解決を図るため、意欲的な環境政策を展開した。それが包装法の施行である。国のリーダーシップと人々の理解・協力が、見事なまでに

ゴミ問題を大幅に改善した。読み取れるのは、人々の課題意識がうまく集約されて、効果的なDSDなどのシステム開発に繋がった点である。日本では、環境対策がなかなか目に見えてこないのが、人々の意識に高まりをもたらさない一因ではないかと考えられる。

第2次～昨年同様、広島県の現状を知ることを中心とした。昨年度購入した『平成21年版 環境白書《環境に関する年次報告》』（広島県）を素材に、環境の現状と取り組みの概要を生徒に提示した。HPなどの興味深いデータなども示した。例えば、厳島神社の回廊が高潮で水没した年間件数などである。また、あまり知られていない環境意識の向上を目指した運動なども紹介し、実際には環境保護活動が県規模で進められていることを示した。私たちが取り組める有効な方法として、カーボンオフセットの取り組みを最後に紹介して、ESDを私たち自らも実践できることを示した。

第3次～今年は1時間増えたので、昨年までの取り組みに加えて、低炭素経済の考え方を紹介した。『低炭素経済への道』（諸富徹・浅岡美恵、岩波新書）を参考に、地球規模のESDの推進には日本の産業構造までも考えていかななくてはならないという指摘には、我々個々であっても大きな展望を持っていないと、この問題の解決には難間が多いという感を強くした。身近なエコ運動に欠けているのは、やはり社会のあり方そのものを見通す認識だと感ずる。頭で理解するESDよりも、身近なところで考えていこうとする方向からこの授業を考え始めたのであるが、結局、一人ひとりの社会への関心の持ち方が、この問題の解決を左右するとの思いに至った。

[生徒の反応と課題] ～第1次のドイツの紹介ビデオでは、視聴ノートを取る形で内容の把握に努めたが、見事な成果を目の当たりにして、驚きを表明する者もあった。生徒をひきつけるのは、「緑のマーク」をはじめとする細やかな環境への働きかけだと思う。第2次の授業では、白書からの情報提供に止まり、生徒から積極的な発言が出ていない。掛け声ばかりの環境学習になっていた。第3次では、専門家が解説する環境政策の問題点と展望を扱った。内容が多かったため、生徒の理解は苦しかった。これはまた別に2～3時間かけて学ぶ内容であろう。

第2次までの授業に、低炭素経済の視点をどのように盛り込んでいくかが課題である。全体的に、生徒に対して教材の提示という形でしか授業を展開できていないが、これらをもとに、より魅力ある単元を作り上げていきたい。

#### H) 地理②＝伊藤 直哉

[テーマ] ～「持続可能なまちづくり」

生徒にまちづくりを提案させると、過疎地には「テーマパークをつくる」、過密地には「公園をつくる」という回答が多い。自分の経験の範疇で、対処療法的な回答に終始する。

このような生徒に、「持続可能性」という概念を土地利用として体現する能力を形成したい。そのような課題意識のもと、まちづくりをめぐる社会問題を教材として選んだ。

まちづくりが、弱者や社会的不平等を生み出すことがある。そのようなまちは、持続可能性という観点から見ても問題がある。より良いまちにするために多大な費用や資源を用いて道路や公共施設などのインフラをつくり直すことは、莫大な資源浪費になるからである。効果や影響などを思考し、どのように町をつくるかを判断すること、そしてそれらを空間的に表現することが求められる。

#### [目標・ねらい]

**知識・理解面**～自分の町や鞆のまちについて、持続可能なまちづくりへの課題と条件を把握する。

**能力・態度面**～まちづくり構想を文章と図を用いて、どのような点で持続可能なまちづくりと言えるかを説明する。

#### [展開内容]

①鞆の浦の埋め立て架橋問題の問題状況を把握する。

埋め立て架橋問題について、推進派の福山市の資料や反対派の「鞆を愛する会」などの資料を用いて、それぞれの主張を把握させる。特に、推進派と反対派が同じ「鞆の町をよりよくする」という目標をもちながら、「橋をつくる」「橋はつくらない」という異なるまちづくり(土地利用)を望む理由について考えさせる。

②埋め立て架橋案と山側ルート案を比較検討させる。

そのなかで、「学ぶ観光」、「大衆観光」という鞆の浦観光のモデルによって、まちづくりが変わることを理解させる。

③自分のまちづくり構想を、文章と絵で表現させる。

他の生徒と構想を見せて話し合い、批判点を受けて、さらに構想を深めていく。

**[生徒の反応]**～鞆のまちづくりについて、文章で意見を書くことはできていたが、それを地図(土地利用や建築物の材質)としてまちづくり構想に示すことには、苦勞していた。その苦勞が、物理や政治経済など他教科の授業を受ける上での問題関心になればよいだろう。そうすることで、カリキュラムレベルでESDが推進されるのではないかと考えるからである。

#### 4. 成果と課題

今年度の研究対象は、生徒に自分に関わる対象とし

て主体的に活動させる方策を盛り込むことであり、そのために1クラスの教材構成を2時間から3時間に増やした。8人の授業展開に共通する観点は、①知識・理解を定着させる段階、②それらを活用しながら、自分たちの将来の社会に関わって考察・追究させる段階をそれぞれの形で取り込んだことで、そこにESDの観点が強められていると考える。前掲の実践報告に下線を施したところである。

そうした実践途上にある各々の実践は、集約される必要があり共通する方向性を検討する予定である。また、個々の実践の詳細は個別に公表されることが期待される。

#### 5. おわりに

3年次にあたる来年度は、2年間に蓄積したESDの観点をベースにして、共通のテーマを多面的・多角的に切り込むクロスカリキュラム教材開発・授業実践に取り組む予定である。

#### 引用(参考)文献

- 1) 「持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議「わが国における『国連持続可能な開発のための教育10年』実施計画」, 2006, p.51.
- 2) 田中治彦「これからの開発教育と『持続可能な開発のための教育』」山西優二, 上條直美, 近藤牧子編『地域から描くこれからの開発教育』新評論, 2008, pp.17-36.
- 3) 櫃本真美代「環境教育における国際的枠組みの変容とESD」ESD環境史研究『持続可能な開発のための教育6』, 2007, pp.59-68.
- 4) 藤崎亮一「社会開発理論におけるコミュニティ開発についての一考察～開発社会学のアプローチを中心に～」長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要, 2006, pp.1-6.
- 5) 前掲1)
- 6) 湯浅清治・由井義通・草原和博・河野芳文・阿部哲久・高田 悟・藤原隆範・宮本英征・栗谷好子・橋本 浩・伊藤直哉・岩村拓哉(2010)「高等学校における「総合的な学習の時間」を活用したESDの展開」広島大学『学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第38号, pp.99-104.
- 7) ESDテキストブック『未来を育てる「人」を育てよう。』  
<http://www.esd-j.org/j/esd-text/img/sample2.pdf>
- 8) 月刊 Forbes日本版2009年6月特集: '09年世界の億万長者 ぎょうせい 2009年4月
- 9) 田中 克(2008)『森里海連環学への道』, 旬報社.